

平成 9 年度年次晩餐会

皇太子殿下、カナダAC首脳とご歓談



挨拶する斎藤会長

この晩餐会には、昨年ご欠席の皇太子殿下、内閣総理大臣として二度目の橋本龍太郎会員をはじめ、国内外から七百五十三名(うち支部からは二百三十二名)の会員が出席したほか、来賓として駐日カナダ臨時大使のジョン・D・テナントさん、カナダ山岳会会長のマイク・モートイマー夫妻、同副会長のロバート・サンフォードさん、同秘書・通訳のサッチ・益田さん、ジャスパー・イエローヘッド博物館館長のロリ・アン・ペルリンさん、カナディアン航空日本・韓国地区旅客営業本部長の永

■出席者は七百五十余名
 本会最大のイベントである、平成九年度の年次晩餐会が旧ろう六日、東京・品川の新高輪プリンスホテル国際館パミール三階の「北辰」で開かれた。

■出席者は七百五十余名

平成 9 年度年次晩餐会…………… 1
 新名誉会員をご紹介します…………… 4
 1997年の永年会員…………… 5
 元会長今西壽雄さんを偲ぶ会…………… 5
 戸隠にミセス・ウエスタン碑建立 5
 DHAULAGIRI の 53 日間…………… 6
 報告

自然保護委・シンポジウム…………… 8
 指導委・岩登り研修会…………… 8
 学生部・第34回マラソン大会…………… 9
 支部だより
 福島支部・東北ブロック集会…………… 10
 富山支部・支部50年の立山登山…………… 11
 岐阜支部・第24回山岳講演会…………… 12
 エッセイ・自然保護…………… 12
 海外の山・ブクレエクの遭難…………… 15
 東西南北
 地形図全国収集整理が完了…………… 13
 カラコルムポーター事情…………… 14
 溪声山色…………… 14
 天空の峰…………… 16
 極私的登山観…………… 17
 ウェストン師の熊本でのクリスマス祭と幻灯講演…………… 18
 図書紹介…………… 19
 新入会員・図書受入報告…………… 20
 会務報告…………… 21
 ネパール国際山岳博物館募金…………… 22
 ルーム日誌…………… 22
 INFORMATION…………… 23

▶日本山岳会事務取扱時間
 月・火・木・土曜日 10～20時
 水・金曜日 13～20時
 ▶図書室開室時間
 日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13～20時

戸一孝さん、毎日新聞カトマンズ通信員のビナヤ・グルアチャリヤ夫妻の参席をみた。

■斎藤会長が会の現状を報告

冒頭挨拶に立った斎藤厚生会長は皇太子殿下、橋本総理に謝意を述べたあと、会の現況について、大要次のように語った。

「今年度の大きなニュースとして、二十四番目の支部として十一月一日、広島支部が誕生した。同地域には山陰支部しかなかったため、今後の発展に期待したい。

八年後には記念すべき百周年を迎えるが、そのための数々の企画検討が行われている。これについての積極的協力をお願いしたい。十一月末現在の会員数は五千八百四十一名。平均年齢は五十六歳から五十七歳の間。本会の活動方針を考えると、中



内閣総理大臣として二度目の橋本会員



メインテーブルの皇太子殿下

高年対策が最も重要な課題と思う。登山の在り方、精神面、技術面、健康面など多方面から考えなければならぬ。

二十一世紀、百周年に向け、具体的目標を設定して、若年層会員の増加を図り、会の活力をより一層高める努力が必要だ。その意味で、昨年度から実施した二十五歳以下の入会者の入会金免除は、効果が顕著だ。さらなる各位の協力をお願いしたい。

今年の晩餐会の新しい企画に『支部とっておきの山』があるが、各位の山行、今後の計画に加えていただければ幸いだ。またこれにより、支部との交流が緊密となることを期待している。

■若手の海外登山に支援を

平成九年度海外登山基金による登山隊は、東海支部K2学術登山隊が悲劇のあいつぐ中、田辺治隊長以下七名の若い隊員が、その持てる技術を駆使して西壁初登攀。青年部・松原尚之隊長のダウラギリ一峰一九九七は、七五〇〇メートルまで到達したものの、悪天候のため撤退を余儀なくされた。しかし彼らは持てる力を存分に発揮したと満足している。来年の青年部・谷川太郎隊長のカンチェンジュンガ登山隊一九九八はシエルパレス、無酸素を試みる。こう

いう若手の計画に対しては、十分に援助して行きたいと考えている。

本席にはカナダ山岳会からマイク・モートイマー会長以下関係者六名の方が来賓として出席されているがアルバータ峰初登頂時、二つに折れてカナダと日本に分かれていたピッケルの折れ口は、果たしてぴったり一致するのだろうか、固唾を飲んでご期待ください。

ネパール政府支援のもと、ネパール山岳協会のネパール国際山岳博物館支援募金が始められようとしている。一九五六年のマナスル初登頂以来、両国の友情にかんがみ、暖かいご理解とご協力をお願いしたい。

インターネットも試行段階だが、JACホームページを開設した。昨年秩父宮家から下賜されたご遺贈金一千万円の使途については、ご遺志を尊重して有効な活用を検討中だ。

日本山岳会は創設以来、常に日本登山界の国内外活動の先駆的、指導的役割を果たしてきた。この輝かしい伝統の中で、皆さんとともに、会発展のための努力をして行きたい。続いて四十一名の物故者黙禱。

■名誉会員・永年会員の紹介

今年の新名誉会員はエドモンド・ヒラリー卿(欠)、船越好文、近藤等(欠)、村木潤次郎、山本朋三郎

の各会員。斎藤会長から名誉会員章が手渡された。

代表挨拶で村木新名誉会員は「終戦の混乱時、先輩に話を伺ったり、教えを受けたたり、たまたままだ会員でないのかと言われ、何となく入会いささか会のお役に立ったかなという気はするが、負い目もあって恥ずかしい。同じく名誉会員になられた船越さんは恩師であり、師弟が壇上に立つのも恥ずかしいし、この二つの恥ずかしさで、普段はいささか勇ましい私も言葉に窮する」と述べた。ヒラリー卿からは「光栄の至りで」とのメッセージが寄せられたことも報告された。

新永年会員は小滝清次郎(欠)、的場大祐、馬場勝嘉(欠)、中嶋正夫、佐藤一栄(欠)、五十嵐篤雄、平田静一郎(欠)、今井喜美子、坂倉登喜子、川崎精雄、村上勝太郎、崎田熙(欠)、本片山数雄、浅野清彦、大賀寿二、岸田権二(欠)、久我良房の各会員。同じく斎藤会長から永年会員章が手渡された。

代表で浅野新永年会員は「私の入会した昭和二十一年、十一月一日から三日まで大阪で第一回国民体育大会が開かれ、登山部門は関西支部で参加、競技を催した。五十年間会員になれたのも多くの山仲間、家族のお陰です」と述べた。



勢ぞろいした新入会員



50年ぶりに合体したアルバータのピッケル

■カナダ山岳会と アルバータのピッケル

招待者(前記)紹介のあと挨拶に立ったマイク・モートイマー・カナダ山岳会会長は、大要次のように語った。「五千九百名の会員からなるカナダ山岳会は、一九〇六年に創立された。その当時カナダには非常に困難な課題が多く、解決されないうまま残っていた。その課題の中で最も難しいものがアルバータ峰。この山に一九二五年、日本で最も熟達した登山家の一人であった横有恒氏と登山隊が、比類なく卓越した技術と不屈の精神により初登頂に成功。登頂の証として頂上にピッケルを残した。アルバータ峰はその後二十三年間再登を許さず、米登山隊が一九四八年に第二登に成功した折、日本隊のピッケルを発見。引き抜こうとしたピッケルは折れ、上から四分の三となったピッケルとともに彼らは帰来。ほぼ四十五年にわたってアメリカ山岳会の記録保管所に保存された。」

その後、一九九五年にカナダに戻り、ジャスパー・イエローヘッド博物館の日本隊アルバータ登頂コーナーの永久展示品となった。そして一九六五年、日本登山隊が再び登頂。ピッケルのスピッツェ部分を発見。一九二五年から七十二年間にわたっ

て、カナダと日本とに離れ離れになったピッケルのそれぞれの部分の所在が今夏になって初めて明らかになった。我々代表団は、この有名なアルバータ峰のピッケルを、元の姿に戻してやるために日本にやってきた。我々はまた西暦二〇〇〇年に、ジャスパーにおいて行われる初登頂七十五周年記念行事を通じて、カナダと日本のアルパインクラブの親善を祝うための計画を立てることも目的としている。その時我々は、アルバータ峰の頂上で、再びこの二つのピッケル部分を結合させようと思っている。皆様多数の方々が、この画期的な祝賀行事のために、カナディアンロッキーを訪れることを心から希望する」

さて、アルバータ峰初登頂時の二つに折れて、カナダと日本に分かれていたピッケル上下の折れ口はぴったり一致するのか? 斎藤会長、ロリ・アン・ペルリン館長立ち合いのもと、マイク・モートイマー会長と原謙一会員(長野高校山岳部OB会長)が手にした上下は、ぴったりと合体した。

■広島支部、新入会員も紹介

続いて、広島支部設立を祝しての鏡割りは、両国山岳会会長にジョン・D・テナント代理大使、村木名誉

会員、浅野永年会員、泉尾広島支部長によって行われた。樽は地元銘酒「賀茂泉(前垣広島支部会員贈)」。

一連のセレモニーを終え、織内信彦名誉会員が「日本山岳会の伝統と歴史のある晩餐会。参会者に心から敬愛の念をもって、会の発展と、会員各位の至福を祈りたい。また東海支部K2学術登山隊の西壁初登攀、着々と計画が進められている、青年部のカンチェンジュンガ登山隊などすべてに想いをよせて」と乾杯の音頭をとった。

待ちに待った会食。七十四の円卓では、各委員会、同好会から推薦されたテーブルマスターが歓談の輪を盛り上げていった。

この歓談をはさんで、広島支部出席者紹介と泉尾支部長の挨拶、東海支部K2学術登山隊、青年部ダウラギリ一峰一九九七、同カンチェンジュンガ一九九八の登山隊員紹介、新入会員紹介と小松忍会員の代表挨拶、出席の支部と支部会員紹介などが行われた。

テーブル上には、ラベルに「自然を愛し山に親しむ 今西壽雄」と墨書された吟醸酒が。

皇太子殿下ご退席、続いて橋本総理が立ち上がった後も、出席会員の会場内歓談は尽きることがなかった。やがて定刻を迎え、参会者は名残



JACグッズも好評



各支部「とっておきの山」展示



インターネットJACホームページを披露

を惜しみつつ、来年の再会を約し、「山岳第九二年」九七年版会員名簿」を手に、会場を後にした。

なお、晩餐会に先立って、隣接の慶雲の間では、特別展「支部とっておきの山」やカナダ山岳会特別コーナーが設けられ、上下にわかれたピッケルの展示も行われたほか、白雲の間では「東海支部K2学術登山隊」による、海外登山報告会も開催された。また、恒例の簡易バーや二火会による「お茶とお菓子」のコーナー、JACグッズコーナーも設けられていた。

最後に、設営から運営に苦労された、年次晩餐会実行委員会の皆さんに、紙上をもってお礼申し上げます。

(文・会報編集委員／高田眞哉
写真・同／伊藤 敏)

新名誉会員を ご紹介しします

エドモンド・ヒラリー卿

一九一九年、ニュージーランド・オークランド市生まれ、七十八歳。マウント・クック南山稜の初登攀などを経て、一九五三年エベレスト初登頂。現在はヒマラヤ住民の環境改善、環境保全のため、精力的に奉仕活動に携わっている。

船越好文(会員番号一九四六)

明治四十二年九月二十一日生まれ、八十八歳。南ア、北アをはじめ富士山(十一月)、東北の山々などを登る。北極を眺めに西堀栄三郎氏らと大名旅行も。小樽商大卒。趣味は山の写真撮影であり、著書に山岳写真集『雪線』、『北アルプス』(共著)など。感想「JACにはもっと活発な活動を望みます」



左から船越、村木、山本の新名誉会員

近藤 等(会員番号二三三七)

大正十一年九月二日生まれ、七十六歳。早大山岳部時代は第二次大戦中で思い通りの山行ができず、本格的な登山は一九六二年、シャモニーのフランス国立登山スキー学校での研修会に参加以後。ガストン・レビュファらとヨーロッパ・アルプスのクライムに熱中し、エギーユ・ヴェルト北壁、グラン・パラディソ北壁、

モン・ブラン三山縦走など百二十余峰登頂。一九七一年八月シャモニー名譽市民、同年十二月レジオン・ドヌール勲章、一九九七年春勲三等瑞宝章を受章。著書に『アルプスの名峰』、『ヨーロッパ・アルプス』など、訳書にレビュファ著『星と嵐』ほか多数。感想「日本山岳会には何一つ寄与しておりませんのに、名誉会員にご推挙いただき、身に余る光栄なことと恐縮しております」

村木潤次郎(会員番号三四七二)
大正十二年十二月二十一日生まれ、七十五歳。早大山岳部員として昭和十七年三月・横尾尾根より槍ヶ岳、戦後は積雪期前穂高北尾根、日高ベテガリ岳東尾根などを登攀。ヒマラヤは昭和二十八年の第一次から三十一年の第三次までマナスル遠征にはすべて参加、三十四年ヒマルチュリ遠征など。感想「ただ、恥じ入るばかり。入会以来四十八年、何がしか日本山岳会のお手伝いをしたという思いはありますが、諸先輩と会から受けた恩恵に比べれば、何ほどのことではありません」

山本朋三郎(会員番号三七二三)

大正九年六月二十六日生まれ、七十七歳。北・南アルプス登山をはじめ、ヒマラヤへ十七回、チベットへ三回出かけた。日本山岳会静岡支部設立に尽力、第十二回国体登山競技実行委員長などを歴任。立教大学卒。著書に『南アルプス』など。静岡県体育協会体育功労賞受賞。

一九九七年の永年会員

(社)日本山岳会平成9年度年



今年度の永年会員は17名

小滝清次郎 (会員番号二五六一)
 的場 大祐 (二六六七) 終身会員
 馬場 勝嘉 (二六七四)
 中嶋 正夫 (二七二五)
 佐藤 一栄 (二七六一)
 五十嵐篤雄 (二七八五)
 平田静一郎 (二八四六)
 今井喜美子 (三〇一九) 名誉会員
 坂倉登喜子 (三〇四一) 名誉会員
 川崎 精雄 (三〇四三) 終身会員
 村上勝太郎 (三〇四九) 終身会員
 崎田 熙 (三〇八四)
 本片山数雄 (三〇八七) 終身会員
 浅野 清彦 (三二四五)
 大賀 寿二 (三二五六)
 岸田 権二 (三三〇四) 終身会員
 久我 良房 (三三二二) 終身会員

元会長今西壽雄さんを 偲ぶ会

平成九年十一月八日午後六時より、有楽町のプレスクラブ・メインダイニングルームにおいて「今西壽雄さんを偲ぶ会」が催された。今西元会長が逝去されて三回忌を迎えるにあたり、芳子夫人はじめ七名のご遺族も上京、参加された。故人の徳を偲んで七十四名の人々が集った。

マナスル初登頂、日本・中国・ネパール三国友好登山隊の総隊長など生前の功績は大きく、晩年、ネパール王国名誉総領事を務め、多大の貢献をされたこともあって、ネパール王国大使館一等書記官クマール・ル



今西さんを偲んで挨拶する渡辺兵力会員

ドラ氏の姿もあった。

山田二郎元会長とクマール・ルドラ氏の追悼の言葉のあと、斎藤淳生会長の献杯の音頭で、今西壽雄さんを偲ぶ集いはいよいよ佳境に入り、それぞれゆかりの深い会員の思い出話は尽きなかった。

マナスル北壁からの登頂を果たして帰国したばかりの明治大学登山隊も駆けつけ、集まりに華を添えた。笑みを含みつつ優しく語りかけるような遺影の横に飾られた、当会会員・橋本龍太郎総理から贈られた生花が印象的であった。(村井 葵)

戸隠村に ミセス・ウェストン碑建立

昨年八月初旬、ウォルター・ウェストンの夫人フランセス・エミリー顕彰碑が長野県戸隠村に完成し、披露された。

ことの発端は、その前年に愛知県豊田市で催されたウェストン所蔵による写真展だった。その中にウェストン夫妻による明治三十七年の戸隠山登山の折の写真があり、それを知った村出身者が役場に通報して、役場では写真展の主催者である豊田市在住の本会会員・杉本誠氏の協力を得て、イタリアのトリノ国立山岳博物館から正式に写真を取り寄せ、顕

彰碑を建立したものだ。

披露式典には日本山岳会から小倉竹内両副会長、信濃支部からは田中支部長、金子副支部長が参列した。それに当日は駐日英国大使館からクリス・トロット一等書記官やガールスカウト日本連盟会長・永井かよ子氏の顔も見えた。

ウェストン師を顕彰する碑は全国に数多いが、ウェストン夫人の碑というのはここだけにしかない。本年(一九九八年)は一年間をかけて日本国内で英国祭(フェスティバルUK)が催されることになっており、各地のウェストン碑前でも共催事業が行われる予定である。(三井嘉雄)

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-1-16 TEL.03-3295-4161
 御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161
 後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

DHAULAGIRIの五十二日間

日本山岳会青年部ダウラギリ峰登山隊一九九七
隊長・松原尚之



ダウラギリ北壁に発生した大雪崩

瞬間、ものすごい雪の重圧が背中、そして顔に襲いかかる。間に合わなかった……。容赦なくのしかかる雪に、私は必死で顔を覆う。

カラコルム・スキルブルム峰での雪崩遭難が日本で大きく報道された八月二十一日の朝、私たちは成田を出発した。登攀メンバーは七名、BCマネージャー一名、平均年齢二十歳代、学生も二人いる若い隊だ。

標高六〇〇メートルのテントの中で、私と板谷のどちらともなく、近づいてくるその不穏な音に気づいた。確かに数秒前から私は、その音を聞いていたのだ。

「来てますよ!!」そう、叫ぶや否や板谷が外に飛び出し、続いて私もテントの入り口に向かって這い出す。

目指すはダウラギリ北壁の「梨」ルート。一九八二年に日本のカモシカ同人隊が初登攀に成功するまで九隊の挑戦をはねのけ、その後も再登を許していない。

九月十日、いよいよ登山開始。ベースキャンプの標高は四七〇メートル。正面に仰ぎ見るダウラギリは

なんて大きいんだろう。真っ白な北壁は朝の陽を浴び、神々しく輝いている。この難ルートの初登攀者は、山田昇、斉藤安平、小松幸三さんという、当時の日本を代表するヒマラヤニストたちだ。三人は今や誰もいない。彼らが酸素やたぐさんのシエルパの助けを借りて登ったそのルートに、私たちは自分たちメンバーだけで、しかも酸素も使わずに登ろうとしている。

氷河を横断し、北壁から派生する小さな尾根に取りつく。砂礫と浮き石のみで構成されたひどいヤセ尾根で、極度に危うい。支点はすべて浮き石で取らなければならない。

なんとカルートを作り、九月十五日、五四五〇メートルにC1を建設する。C1の先でセラック帯に突き当たる。覆いかぶさるように林立する二階建てほどのアイス・ビルディングや、今にも落ちてきそうな巨大なつららを避けるように、ひたすら右へトラバース。セラック帯を十数ピッチで抜け、ようやく広大なプラトーに出る。ここから先は、雪崩から絶対に安全と言えるような場所はない。C2は標高六〇〇〇メートル、「梨」の岩壁から続く、小さな尾根上に設ける。

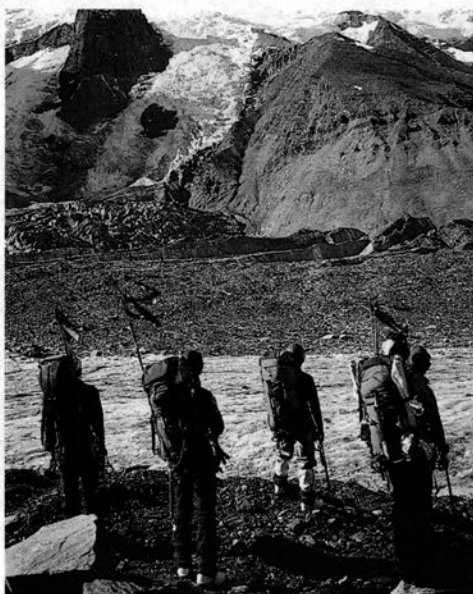
毎日午前中は天気がよく、午後には必ず雲が湧き雪が降る。それでも

九月中はおおむね天気は安定していた。北壁の広大な雪の斜面にルートを伸ばし、「梨」の基部・六七〇〇メートルにC3を建設する。きわめて急峻な雪壁を削り、かろうじて二人用の小さなテント一張り建てる。小用を足すのにもロープに体を確保しておかなければならない。

九月下旬から十月の第一週、本当ならモンスーンも完全に終りを告げ、素晴らしい好天が続き出すその時期、度重なる強い低気圧の襲来で雪の日が続いた。十月七日朝、C2のテントに五人の隊員がいる時、雪崩に遭い、私ともう一名が生き埋めとなり、三人が一〇メートルほど流された。二張りのテントも全壊したが、奇跡的に全員助かった。

「もう、止めて帰りたい」そんな気持ちに芽吹く。他のメンバーはまだまだやる気十分のようだ。まだ止めるわけにはいかない。新しいテントをC2に張り直し、再び上部を目指す。

晴れた素晴らしい天気の下での登高が、衰えかけた頂への気持ちに甦えらせる。薄い空気の中、広漠とした雪の斜面を登りながら、私は死んでしまった仲間たちのことを考える。雪崩で死んだ者もたくさんいる。私よりも能力の高い者たちが何人も死に、私は今まで生き残っている。今



登山開始の日、BCからダウラギリを仰ぐ

頂上アタックを行う。それが、私たちの立てたぎりぎりのアタック計画である。三日間BCで休んだら、アタック・ステージに入る。上部での連続行動による疲労感はあるが、全員順応はうまくいっている。



大雪で猛烈なラッセル

回の隊のメンバーのほとんどが、似たような境遇にあるのだ。彼らが死に、私たちが生きているのはなぜだろう？
今、言えるのは、とにかく私は登り続けなければいけない、ということだけだ。
日程的にも、もうあまり余裕はない。アタック体制が整うまで、BCには下りずにルートを伸ばすことにしよう。幸い、これまでで最高の好天期が訪れた。「梨」の上部七〇五

〇メートルにC4を建設。C3と同じように、普通ならテントを張るなどと考えもしない急な雪壁の中である。「梨」最上部から北西稜までは支点のとりにくい嫌らしいミックス帯だ。雪のつながったバンド状を右にトラバース気味に登り、ついに北壁を抜けて北西稜に出る。見慣れていた風景がドラマチックに変化した。
十月十八日、北西稜上を七五〇〇メートルまでルートを伸ばす。初めて核心部の岩稜を間近に眺める。長く続いた好天も翌日には終わり、十日ぶりに全員でBCへと下る。
松原、松本、奥田、板谷は先に上部に上がり、七七五〇メートルまでの核心部岩稜のルート工作、棚橋、椎名、川高の三名はあとから上がって七五〇〇メートルにアタックキャンプを作り、翌日頂上アタックを行う。それが、私たちの立てたぎりぎりのアタック計画である。三日間BCで休んだら、アタック・ステージに入る。上部での連続行動による疲労感はあるが、全員順応はうまくいっている。

十月二十三日、午後から静かに雪が降り出した。まるで冬が来たようだ。翌二十四日、降雪はさらに強まり、一日中降り続けた。C2で雪崩に遭った時の大雪ですら、BCでは一〇センチ程度しか積もらなかった。しかし、今回はなんと一メートルである。上部ではいったい何メートル積もったのだろうか？
BCからすさまじいラッセルとなり、再びC1まで上がるのに二日間を要する。二十七日、午後から雪が降る中、C1上部ラッセルに向かう。「雪の降る中、トレースつけに上がるなんて普通じゃないよ」。二十八日も降雪が続く、苦労してつけたトレースも完全に消えた。登頂を断念することをとうとう決意した。

「雪崩だ!!」。前を歩く松本の声にハッと顔を上げると、これまでに見たこともない巨大な雪煙が空一面を覆おうとしている。瞬間、すべてが終わるか、と思った。
十一月一日、C2の荷物の回収に上がってBCに下り、長かった登山のすべてが終わるというその日に、それまでの二か月間の登山中にも見たことがない大雪崩が北壁から発生したのだ。フィックスの支点のところにうずくまると、ほどなく雪煙に吹きつけられ、視界がまったくきかなくなる。「全滅か。どうして、最

後の最後に来て……」。けれども、その雪煙の後には何も来なかった。雪崩本体はだいぶ上で止まっていたのである。無事にC2に上がり、荷物を回収してBCに下山する。すべてが終わった。
ダウラギリは最後の最後まで私たちに死の恐怖という試練を与え続け、そしてどうやら全員を、生きて帰してくれたのだった。
*
今回の登山を実行するにあたり、日本山岳会のたくさんの方々にご支援を賜りました。この紙面をお借りして、心より御礼申し上げます。

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。

重量78g.
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
実色メタリック ￥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、来書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411

株式会社 石神井計器製作所

報告

REPORT
1月

自然保護委員会

シンポジウム・

登山と自然保護を考える



3人のパネリストを中心に活発な討論が続く

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

当委員会は活動方針として

一、山岳地域の大規模自然破壊に対する監視、反対活動

二、自然保護思想の向上のための教育、啓蒙活動

を掲げている。今回、その啓蒙活動の一環としてのシンポジウムを平成九年十一月二十二・二十三日にかけて、神奈川県藤野町(本年十月、国体山岳競技開催地)の県立藤野芸術の家で開催した。日山協並びに藤野町の後援、自然と人間の暮らしを考えるフォーラム・N協賛。

一日目、第一部は「大自然とともに生きる人々の歌」。アルゼンチンで最も有名な日本人、ジャドール(ギター・詩人) 高野太郎氏のフォルクロレ・コンサートである。会場に集まったJAC会員はじめ一般、町民の方々など百八十名の参加者は、ギターと張りのある歌声にしばし耳を傾けた。

休憩をはさんで地元藤野町・倉田町長、主催者を代表して竹内副会長の挨拶の後、第二部「登山と自然保護を考える」と題してシンポジウムを国見利夫、松本恒廣両会員の議事進行で開会した。パネリストは日山協国体委員長・原一平、山梨岳連会長・高室陽二郎、森林インストラクター・審査委員・小倉重子の三会員。

最初に原会員が国体委員長としての立場から、山岳競技を実施するに当たり、自然保護についての配慮として、「縦走」は新しく道は作らず手をかけないでできる場所を選ぶ、「登攀」は人工壁を使う、「踏査」は五年先の大会から種目から外す、などの基本方針を述べた。

高室会員は南ア大樺沢汚水問題に関連して山梨岳連が推進しているし尿持ち帰り作戦を紹介。携帯トイレのサンプルを持参し実演? つきで聴衆の関心を集めた。また、行政側に対しての注文として、縦割りの弊害をなくし、山岳問題を処理する県の窓口を一本化するよう働きかけ、実現しつつあることを報告した。

小倉会員は、今や皆自然と一体となって暮らすということを忘れている。警沢が当たり前の世の中、どうやったら自然を取り返せるか、じっとしてられない状態にきていると切々たる思いを述べた。

パネリスト三人による問題提起の後、質疑応答があり、予定をややオーバーして午後の部は終了。

夕食後の自然学講座やミニコンサート、お酒を囲んでの懇親会など、夜遅くまで続けられた。

翌日は心配された空模様も快晴で、自然観察山行や山歩きに各パーティーが三々五々出発していった。

盛り沢山のプログラムで、一つ一つは生半可なところもあったかもしれないが、自然保護PRと会員相互の交流を深めるという目的は達せられたと思う。最後に山の自然学研、緑爽会、紫蘭会、ジャックなど各グループ、多くの山仲間や会館の皆様のご協力に支えられて、散会することができた。(松本恒廣)

指導委員会

岩登り研修会

確保技術と遭難救助研修

十月二十四日、老若男女約三十名が立山連峰の紅葉の照り返しに頬を染めながら、ここ立山にある文部省登山研修所に集結した。

今回のテーマは、より安全な確保技術と搬出法の習得である。現在のクライミングは「落ちる」ことが前提のフリークライミングの台頭によ

り、人工登攀主体のスタイルからフリー主体のクライミングに移行している。また、最近のルートはネイリングによるプロテクションを前提として拓かれたものも多くなっている。このような流れの中で、初心者もベテランも岩場で平等に危険にさらされている自分の生命を、可能な限り安全確実に遊ばせるためには、常に現在のクライミングスタイルに合致した新たな知識・技術の導入が必要となってくる。今回の研修は主にアルパインクライミングにおけるこれらの技術や装備について、その理論と実践を学ばんとするものである。

【第一日目】午前中・机上講習。落下係数と制動確保理論について。文登研の柳沢所長は、優しく噛み砕いて説明して下さる。唐沢岳幕岩のルート開拓時のエピソードなど、ところどころにピリッとスパイスを効かせた話しぶりで、ツボを見事に押さえ込んでいた。

午後、計測器を使用したタイヤ落としによる確保訓練及び屋外人工岩場での各種支点作りの実技。

今回文登研施設を使用させていた目玉の一つ、伝説の「恐怖のタイヤ」がこれである。頭上はるか四六階建てビルの屋上に匹敵する一五メートルの高さから垂直落下してくる六〇キロのタイヤを制動確

保する、というものである。その落下衝撃はすさまじく、うまく止められない場合、確保者に直接九〇キロ近い衝撃がかかる。肩がらみ確保二回、ATCを使用した確保二回と一人計四回体験するのだが、衝撃によりザイルは切れるわ、確保しきれずタイヤが地面に激突するわで、大変な体験であった。もちろん、みな最後には慣れてきて、ほとんどの研修生がうまく確保できるようになった。こうした訓練はここ以外ではほとんど経験できないので、とても貴重な体験であった。

夜、希望者は屋内人工壁でフリークライミング。

文登研の人工壁はなかなか充実している。幅三〇メートル、高さ七・八メートルほどの壁一面に垂直以上のルートが目白押しに並んでいる。これが登り放題なんて、フリー大好き人間にとっては感動ものである。中には初日から飛ばし過ぎて、たちまち指が擦り切れた研修生もいた。

【第二日目】午前、屋内人工壁でフリークライミング。

午後、屋外人工岩場で昨日の続き、人工登攀技術を交える。みんな熱心で、講師の方々が終りといっても暗くなるまで登り続けていた。

紹介の後、和気あいあいと話が弾む。研修生は学生が多いせいか、飲み方も気合いが入っている。

【第三日目】屋内人工壁で懸垂下降時の仮固定、自己脱出訓練。その後屋外人工岩場で、これまでの講習内容の復習及び遭難時の怪我人搬出訓練。

折りからの前線通過で気温がぐっと冷え込み、近くの山の頂も白くなっている。時折日が射すものの、氷雨や、はてはあられまで降り、遭難現場のようなセッティングとなった。みな「さみうよ」と声をあげながらテキパキと怪我人を背負っては岩場を懸垂下降する。研修の成果が早くも上がっているのだろうか。初日は自信なげに立っていた人と同じ集団とは思えないたくましさである。

三日間で経験、習得したものは、今後の登山人生において非常に役に立つであろうことが多かった。岩場からの搬出や一五メートル以上のパートナーの落下の確保など、できれば本チャンでは経験したくないものの、いざという時の大きな自信になったと思う。

現在クライミング人口が徐々にではあるが増加する中、安全登山の実践のためにも学生はもとより中高年クライマーの方に、是非受けていただきたい研修である。

最後に三日間、じっくりおつき合いくださった熊崎常務理事、温かくお世話くださったミセス熊崎をはじめ講師の方々に心からお礼申し上げます。

(平野直子)

学生部

第三十四回マラソン大会開催

昨秋十一月十六日、恒例の皇居マラソン大会が盛大に行われました。十七の大学から総勢百名弱の参加があり、デッドヒートを繰り広げました。例年に比べ暖かい気候に恵まれたものの、記録のほうは全般的に低調でした。

団体戦の結果は次の通りです(個人戦は省略)。

優勝〓明治大学A(一時間十六分六秒)、二位〓法政大学A(一時間十六分十五秒)、三位〓千葉工業大学A(一時間十七分五十五秒)、四位〓青山学院大学A、五位〓明治大学B、六位〓法政大学B、七位〓上智大学、八位〓東京農業大学、九位〓専修大学、十位〓成蹊大学、十一位〓早稲田大学、十二位〓東海・横国・明学混成、十三位〓千葉・一橋混成、十四位〓農大・法政混成、十五位〓学習院大学、十六位〓拓殖大学、十七位〓青山学院大学B

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

福島支部

平成九年度東北ブロック集會 岳温泉に五十四名が集う

恒例となった東北ブロック集會は福島支部の当番により、十月十一、十二日、二本松市岳温泉・国民年金保養センター「阿多々羅」を会場にして開催された。参加者は東北各支部の会員、首都圏、信濃、関西支部さらに本部から斎藤会長、小倉副会長、吉永常務理事をお迎えし、総勢五十四名の集會となった。

●東北ブロック集會

十一日午後四時から会場ロビーで開かれたが、青森支部は欠席。他の五支部の支部長、事務局担当者により来年度ブロック集會について協議した。その結果、秋田支部が当番す

ることに決定。男鹿温泉を会場にして「なまはげ」ゆかりの男鹿半島の真山、寒風山への山行を盛り込んだものにしたい、との秋田支部の提案を了承。時期についても当番支部に一任することを決めた。

●懇親會

午後六時からセンター大広間にて開かれた。まず佐久間福島支部長が歓迎の挨拶を述べ、続いて斎藤会長が「本年度から各支部の集會に積極的に参加することにした。福島支部は創立五十周年を迎えられたが、山梨支部、信濃支部も五十周年である。また、広島支部が十一月に発足する。日本山岳会の会員は現在五千八百人、業務は各理事が役割分担している。自然保護については竹内副会長が担当であり、青森、秋田では白神山地の問題、山形は鳥海山のイヌワシの保護など、会員が大きな関わりを持っている。福島へは初めて伺った。集會・山行を楽しみにしています」と挨拶。

このあと岡田秋田支部長の音頭で乾杯し、懇親の宴會に移った。杯を酌み交すかたわら、各支部ごとに自己紹介、和やかに秋の夜長を飲みかつ語らい過ごした。

●山行

十二日早朝、佐久間支部長、西関登山隊長以下数名で観天望気。窓が



悪天候にたたられた奥岳登山

ラス越しに見る景色は、流れの速い雲の切れ目から朝日が差しこみ、風は強いがまずまずの天気と判断した。しかし西関隊長から、風が強く吹くと奥岳のゴンドラは運転できなくなるので要注意、と助言があり、この場合は奥岳から登山コースを登ることを申し合わせた。

行動は便宜上五班（一班〓本部・首都圏部、二班〓岩手・山形、三班〓宮城、四班〓秋田、五班〓福島）

編成。各班には二、三名ずつ福島支部の会員がガイド役として付き添うことにした。

マイクローバス、マイカーに分乗して奥岳ゴンドラ乗り場に移動。ゴンドラは案の定運転をみあわせている登山道を登ることに決定し、奥岳を九時に出発。

ゴンドラなら十分たらずの移動距離を、歩けば一時間余のアルバイト。当てが外れたが、頂上を目指すわけではないと、林の中の登山道をひたすら登る。コースは等高線一〇〇〇メートル辺りからサラサドウダンやゴヨウマツの疎林の中をくぐり、大きな露岩をまたいで進む。点在している岩石がコースをさえぎっていていささか厄介だ。

五葉松平へもう一息と思われた頃、遙か稜線に沿ってゴンドラがゆらりゆらりと上がって行くではないか。いまさら引き返せない。いっそのこと止まったままでいてくれたほうがあきらめがつくのと、ぼやきながら登り続ける。今度は時雨がやってきた。やがて雲になり、湿り雪に変わって横殴りに吹きつけてくる。ゴンドラ頂上駅の上部に達した十一時頃から切れ目なしの雪となり、ヤッケを容赦なく濡らし始める。

西関登山隊長は各班のガイド役を集め、安達太良山頂からくろがね小

屋への予定のコースを断念し、頂上手前の火山礫地帯(一六〇〇メートル付近)まで登って引き返すこと、ここから引き返すことを希望する班は、ただちにゴンドラ駅に向かうことを指示した。

秋田支部の四班は引き返すことにしたので、佐久間支部長以下数名が付き添って下山開始。その他の班はもうしばらく登って下山地点を判断することとして出発。

雪は相変わらずの降り方で、笹や木の葉にシャーベット状になって積もり、溶けて登山道をぬかるみにしている。早めに登った登山客がほとんど下ってくる中に、スニーカーを履いた子供たちが、ビニール製の簡易雨具を着けておりてきた。トレーニングパンツの裾はすでに泥まみれである。「気をつけて下りなさいよ」と声をかけたが「もう転んじゃってびしょ濡れだよ」と半べそ返事。一緒にきた大人たちはどうしたのだらうと、子供たちの後ろ姿を見送った。

やがてわが隊の先頭集団も引き返してきた。「二六五〇メートル地点まで登ったが、吹雪で視界が悪く、頂上確認はできなかった」という。気付け薬を嗜んでいたしんがり役の我々老人組も、ただちに引き返すことにした。

ゴンドラで奥岳駅に着いたのが十三時十五分。保養センターのマイクロバスが迎えに来るまでの間に昼食をとり、記念の集合写真撮影後、解散を宣言した。

この頃になって、上は雪雲に覆われていたが、駅辺りは薄日が射してきた。お天気のせいとはいえ、見せ場のない山行に終わってしまった。万事不行き届きで皆様にご無礼したがお許しいただきたい。(安藤 治)

富山支部

支部五十年を語る立山登山

十月中は悪天候続きで、今年はいつになく立山に早く雪がきた。

十一月二日、十五時三十分、天狗



積雪を踏みしめて登った雄山山頂

に着いた。天狗平の積雪六〇センチ、弥陀ヶ原一面がこの時期に雪になったのは十年くらいなかったことだという。

高原バスの路線は除雪され、アルペンルート(長野県大町〜立山室堂(富山))の客を運ぶバスはタイヤにチェーンをつけ、凍った路面を行き来している。路線の道の縁に、夕焼けの立山・剣を写そうと三脚を立てたカメラマンたちが並ぶ。マイナス一〇度の世界だ。

小屋の中では、ストーブが廊下で赤々と燃えているが、部屋の中までは届かない。過ぎこしの五十年の思い出を酒のつまみに語り、時間の過ぎるのも忘れていた。

翌三日、朝明けの遅い五時頃、三脚を持った人たちの騒がしさに目が覚めた。外は薄暗いが、今日もよい天気になりそうだ。

カメラ仲間の帰りを待つ朝食をとり、八時に天狗山荘の車で室堂まで運んでもらう。ここから先はワカンの世界だ。先発隊のアイゼンの踏み跡がある細いトレースを追う。久しぶりに雪のきゅうきゅうと泣く音に酔う。靴の中まで冷たさがしみこんだ。晴天なれど風は冷たく耳が痛く感じる。一の越(二七〇〇メートル)に九時五十分に着く。後立山の峰々は素晴らしい。黒々とした水晶

岳、ガキ岳の尾根の上に富士山が見えている。

ここでアイゼンを着け、雄山へと登る。ところどころに吹き溜まりがあるものの岩が出ていて、雪面をたどりながら頂上へと進む。一等三角点(二九一・六メートル)の御影石が陽に照らされて光っている。社務所の建物も鳥居も三分の二は雪に埋まっている。三〇〇メートルの頂上の神殿だけが雪をまわらずに建っていた。三六〇度の眺めは素晴らしい。遠く西の霧の上に白く浮かぶ白山、飽きることのない眺めを後に一の越に下る。一の越小屋で熱燗で乾杯。室堂までの下りは足が重かっ

ネパールへようこそ

1998年はネパール観光年です。

【ネパール観光年スペシャル企画】

- I. ネパールヒマラヤ八千峰全9座スーパー・フライト6日間
●出発日: 2/23・3/16・4/13・5/4 ￥338,000
- II. 世界の八千峰全14座パナマ・フライト7日間
●出発日: 2/23・3/16・4/13・5/4 ￥388,000
- III. カトマンズからチベット高原へ、ヒマラヤ大展望8日間
●出発日: 3/28・4/11・5/9・5/16 ￥428,000



運輸大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員

ALPINE TOUR SERVICE 株式会社

〒105 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911

大阪 ☎06(444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

たが、空は一面紺碧であった。

(木戸繁良)

岐阜支部

第二十四回山岳講演会と 能郷白山懇親登山

十一月七日、長良川スポーツプラザにおいて、前会長村木潤次郎会員を講師に招いて「山登りの今昔、人様々」をテーマに、講演会を開催した。会場へは、会員、会友及び一般の方々を交えて八十人余の聴講者があり、盛会であった。

小学生の頃「遠足で山へ登った時から何となく登山が面白いと思った」というエピソードから、旧制中学生



能郷の白山山頂で恒例のヤッホー

の頃、神戸の六甲山へよく登った。以来、早稲田大学山岳部時代に積雪期の槍、穂高岳へ縦走登山、一九五三年のマナスル第一次から第二次、第三次登山隊への参加、一九五九年のヒマルチュリへ遠征隊長として参加、一九九一年のナムチャバルワへ第一次登山隊副隊長として参加など、山へ登ってきて六十年余、その山登りの変遷や、その間交流のあった岳人のプロフィールと思い出などを語っていた。

翌八日は、快晴に恵まれて「古い伝統と文化を伝える村、そして、大自然のやさしさと厳しさを知る村」で知られている、根尾村の能郷白山(一六一七メートル)へ、村木講師とともに三十一名が参加して、懇親登山を行った。

標高一〇三〇メートルの温見峠登山口付近は紅葉が鮮やかであった。午前十時に急な登山道を登り始める。二〇〇メートル辺りから雪があり、登山道はコチコチに凍りついて難儀しての登りであったが、正午ちょうどに全員が頂上に立った。

村木講師の音頭で「ヤッホー」を唱和し、ビールで乾杯。

頂上からは、北に荒島岳、白山、西に御嶽、乗鞍岳、それに穂高岳など北アルプスの山々を望むことができた。

(清水芳彦)

エッセイ・自然保護

身近な自然

雑木林の保全について

伊藤 敏

自然保護委員会主催による恒例の観察山行は、昨年の晩秋、神奈川県藤野町の峰山で行われた。峰山は標高五七〇メートルのいわゆる里山。尾根には落葉広葉樹の雑木林がよく残されていて、紅葉を眺め、落ち葉を踏みながら秋山の風情を楽しんだ。コナラを主とした雑木林は、昭和三十年代に伐採、更新されたもののようだが、林内は比較的明るく、陰性の常緑広葉樹の侵入はまだみられない。冷温帯と暖温帯との接点にあるこの地域では、陽樹から陰樹への遷移は緩やかなようだが、暖温帯ではそうはいかない。クヌギ、コナラなどの雑木林は放置されれば、カシ類などの暗い照葉樹林に速やかに移行する。

フ場などに開発され、あるいはスギ・ヒノキなどの人工林化されたほか、放棄された薪炭林は荒廃し、衰退しつつある。

「武蔵野の雑木林」としてイメージされる落葉広葉樹の薪炭林は懐かしい里山の風景であり、身近な自然として親しまれてきた。林内は比較的明るく、林床植生はよく発達する。森には昆虫類、鳥類をはじめ多くの生物がすみ、豊かな生態系がつけられる。

しかし、このような多様性に富む雑木林は消えようとしている。雑木林の植生が変われば、それに依存する生物はすめなくなる。暗い照葉樹林に移行するにつれ、多様性は失われていくのである。

雑木林の自然を守るためには、自然の推移に任せるのではなく、人手を加えねばならない。薪炭林は、薪炭材採取のために十五、二十五年の定期的な伐採により維持されてきた。薪炭林復活のためには、かつて行われた薪炭林作業の適用が望ましい。しかし森林所有者による薪炭林経営の復活はもう望むべくもない。最近、市民参加による「里山管理運動」が各地に起こりつつあるが、薪炭林作業の担い手として期待したい。

かつて農山村において、薪炭林、農用林として経営されてきた雑木林は昭和三十年代に燃料革命、化学肥料の普及に伴って、その用途を失ってしまった。雑木林は、宅地、ゴルフ場などに開発され、あるいはスギ・ヒノキなどの人工林化されたほか、放棄された薪炭林は荒廃し、衰退しつつある。

(自然保護委員)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚をお願いします)



イラスト 野田四郎

二万五千分一地形図 全国収集整理が完了

武田満子

■全数そろいました

お待ちどうさまでした。かねて作業中だった二万五千分一地形図の整理がようやく完了し、使えるようになりました。ルームの図書室に完備しています。

二万五千分一地形図を全数そろえているところは、全国に何か所もありません。二万五千分一のスケールで日本全域を知ることができるのは大変貴重なことです。引き抜いて使ったら、必ず元へ戻しておいてください。

約半数は国土地理院が新しい図に差し替えるために入れ替えたものをもらい受けました。不足分について

は最新のものを買い足しています。

そのため製作年は新しいものばかりではありません。差し替えは原則としてしないことになっています。

二万五千分一地形図は、平成九年十月一日現在四千三百六十四面あり、差し替えは非常に手がかかり、今の体制では不可能だからです。

■最新の地形図を入手するには

最新のものは地形図を扱っているところに頼むと手に入ります。次の元売りに連絡すれば日本全国どの場所でも入手できます。とくに日本地図センターでは通信販売も行っていますから、地方の方は利用されたいでしょう。「地図一覧図」も最新のものを無料でもらうことができます。「地図一覧図」には、測量・改測・修正・部分修正の新しい年次が載っています。

地図センター及び発売元

●(助)日本地図センター販売促進部

〒一五三 目黒区青葉台四一九一六

TEL・〇三―三四八五―五四一四

FAX・〇三―三四六五―七六八九

●日本地図共販(株) 〒一〇一 千代田区神田神保町一―二三

TEL・〇三―三二九四―五二〇六〇八

●(株)武揚堂 〒一〇三 中央区日本橋三―八一六

TEL・〇三―三二七―二四五―五

●内外地図(株) 〒一〇一 千代田区神田小川町三―二三

TEL・〇三―三二九一―〇三三八

地形図は、ルームの図書閲覧室のスチールの引き出しに入っています。分類は地域別とし、二〇万分一図ごとに綴じてあります。表紙では引き出しの整理番号と綴じてある地図の範囲がわかるようになっています。

全体の索引は、二〇万分一地勢図を使うようにしてあり、二〇万分一地勢図は一冊に綴じて表に出してあります。北方四島については二万五千分一がないので五万分一で用意しました。これは北から南へ上から整理してある引き出しの一番下に入っています。

■山地部は十年ごとに修正

現在の二万五千分一地形図は、昭和三十九年度にはじまって五十八年度に離島を含めた日本領土全域が完成しました。全部空中写真図化によ

るものです。最近では、コンピュータを導入して修正作業を行うようになっています。原則として都市部は三年、周辺部は五年、山地部は特別のことがない限り十年おきに修正されます。二万五千分一地形図が修正されると、五万分一地形図もそれを使って修正されます。部分修正の場合、長野の新幹線、関西空港のように大きな修正については、都市部、山地部を問わず、完成の日に合わせて、修正されたものが同時発行されます。

問題の多い「地名」は、各都道府県の市区町村から提出される「地名調査」をよりどころとしています。戦前の地形図のように、国土地理院の責任によって改めることができない時代になっています。しかし、間違いや疑問についてはできるだけ対処するようになっていますので、遠慮なく国土地理院へ知らせるとよいと思います。

地形図のモニター制は今も行われており、毎年八月から九月にかけて募集されます。ボランティアですが、モニターであることを証明する証書と申請した部分の調査範囲の地形図が配布されます。

市販されている案内用の地図にも国土地理院の二万五千分一地形図が多く使われるようになっています。

■地形図を読む楽しみも

地形図を読むことに上達するためには、地形図を持って歩くことで、どのくらいの荷物を背負って歩くとき、自分のペースでは、比高何メートルをどのくらいの時間で歩けるか、地形図上で現在位置をどのようにして知ることができるか。帰ってきてから歩いてきたところをどのように地形図上に整理することができるか。地形図で予察するとき、地形がどのくらい真実に近く読めるか。そして目的の山頂からどの山を見通すことができるか、などなど……。

そのうちに地形図の上で山に登り谷をよじり、旅をすることができるようになるでしょう。地形図を読む楽しみは尽きることがありません。

日本全国の二万五千分一地形図を整備した意図を汲み取り、大いに利用していただきたいと思います。

また、戦前の『山岳』などを読んで古い地図を見たいときは、国土地理院の本院か、東京・竹橋の気象庁後ろにある国土地理院の関東地方測量部、国会図書館などでゼロックスの複製を焼いてもらうことができます。ご利用ください。

今年から二万五千分一のC/Dが発売されています。一枚に六十面くらいを目安として二〇万分一地勢図単位にまとめられ、年内に約半数が整

備される予定です。九州、東北、北海道などの一部残りは、本年作業が行われ、全国完了する予定です。離島も本年中に完成する予定です。

ルムの二万五千分一図の整理を担当したのは、須藤節子、松永康子、武田満子の三人でした。楽しんで大切に使用してくださいようお願いいたします。日本全国を対象にするような研究にも使われることを希望します。

カラコルムポーター事情

飯田 進

先日、カラコルムで登山エージェントを営む友人から、警鐘つきの便りをもたらした。カラコルムに出かける方に読んでおいてもらったらと思いい、以下に要約しました。

カラコルムを訪れる登山者はトレッカーを含め年々増加している。

これらの人々は大抵の場合、エージェントを通じてポーターのお世話になる。ああいい山行だった、と無事下山できれば（大抵はそうなのだ）大慶至極なのだ、一旦緩急あれば、それに伴う種々のトラブルが発生する。その中には、ポーターたちとのものもかなりある。こちらにも事情があるように、彼らにも諸々の事情がある。彼らは登山者につい

て行くのだから、危険と重労働を伴うことになる。当然のことながら、約束した賃金は払ってもらわねば困るのである。ところが、エージェントによるのだが、そこで雇っているガイドやサードのピンハネがあった、またにもポーターたちに渡らない場合が、往々にしてあるのが実情である。とくに搜索、怪我人病人などの移送について、ただ働きさせられるケースが多い。あとで必ず払うからと口約束し、終わったあとで「君たちはきつと、アラーのお恵みがあるから心配するな」で終わってしま

うのを恐れるのである。したがってポーターたちは、日常的にエージェントの情報入手に明け暮れており、狭い登山界の事故などは、かなり正確につかんでいるのである。その結果、信用度の少ないエージェントからの仕事は、それなりに行われ、いわゆる「気働き」はないのである。宗教上の理由や何やかやと理屈をつけて逃れるのも、そのためである。

パキスタンのポーターたちは決して無精者ではない。いざとなれば、親身になって協力してくれる頼りになる人たちである。要はポーターたちへの思いやりが大切。ちやほやすとか、おべんちゃらをしろというのではない。彼らも我々と同等の人格を持ち、プライドを持っているの

だ。それらを念頭において接すること。そして労働保証、安全保障をしっかり行っているエージェントを選ぶことが先決なのである。

溪声山色

西郷正郎

異色の登山家、石間信夫氏が亡くなってから三年になる。このたび彼の山行記録と文章が単行本にまとめられ上梓された。

私が彼と知り合ったのは日本山岳会静岡支部の集会の席上であった。私の耳に入ってきた彼に関する噂は毀譽褒貶相なかつたもので、彼は変わった山の登り方をする人という印象だけが残った。しかし一緒に山に登ったり話し合ったりしているうちに、私の七十年に近い山登りのなかで、この人は類のない特異な性格を持っている登山家であることが次第に判ってきた。

彼が亡くなる前の年のこと、大井川支流笹間川上流の山間にある「小猿郷」と呼ばれる村落の農家の囲炉裏端で、一夜を過ごしたことがある。そこで私は彼の一風変わった山登りの考え方は、どこからきたものか、その信念の一端を知ることができた。彼が私淑していたのは道元禪師で

ある。曹洞宗の始祖道元(元)の思想は弟子によって伝えられた「正法眼蔵」に残されている。極めて難解な教義である。山岳を仏法修行の場として選ぶことは、他の禅宗や密教系の仏教、あるいは道教、儒教などで特別に珍しいことではないが、禅宗ではとくに重視される。

石間氏が道元の「正法眼蔵」をどこまで読み砕いて自身の行動の指針としていたかは判らないが、自分の一家の宗旨とは別に、道元の説く山の溪流のように清く徹しい教えに魅力を感じていたのかもしれない。

「正法眼蔵」には山岳についての自然観が表れている。禅問答がいくつかある。そのなかに石間氏の言動の根元となるに相応しいと思われる語句を探せば、溪声山色の言葉がある。

道元は今でいう西欧の理知主義にとらえられることなく、また東洋的な情念主体の思想に惑わされることもなく、主観と客観に分離しないままを現実として自己に受容していくのを、悟りの境地に入る道とした。その道筋の修行として互いに問答を行い、また座禅によって心身を鍛練した。(そこで使われる言葉を「偈」と称し、仏教の教義また礼讃を現す言葉で、多くは中国の漢詩から得た漢字四字で構成された詩句が用いられた。)

海外の山

ブクレエフの遭難

江本嘉伸

新春早々、カトマンズからのニュースに驚かされた。

アナトリー・ブクレエフが、アンナプルナで行方をたっている、という。

このコラムにも何度か登場してもあったが、アメリカ在住のカザフ国籍のロシア人登山家で、一昨年五月の難波康子さんが帰らなかった「エベレストの悲劇」で、ガイドとして活躍した。

現地からの報道によると、ブクレエフは十二月二十五日、イタリア人登山家のシモーネ・モロとともにアンナプルナ登攀中、五九〇〇メートル地点で稜線からの氷塊の落下で起きた雪崩に巻き込まれ、行方不明になった、という。

モロは、自力で脱出し、ベースキャンプまで六時間がかりで下り、ヘリでカトマンズに運ばれた。

ネパール空軍のヘリによって、捜

索活動が続けられ、ベースにいた恋人のリンダの要請で二人のシェルパが雪崩現場に急行したが、何も見つけれなかった。

アナトリー・ブクレエフは、ソ連崩壊後、アメリカに新天地を見つけてヒマラヤ通いをしてきた、ロシア人クライマーである。その強さは、三度のエベレスト登頂を無酸素でなしとげていることからわかる。

ただ、これまでのヒマラヤニストとは、どこか持ち味の違う印象がある。それは何なのか、筆者には関心があった。

難波たちの遭難の直後、さっさとロシアに単独登頂したのもそのひとつだ。チャンスがあれば、一気にものにするしたたかさ、というべきか。「クライアントを安全に下山させる責任のあるガイドが、どうして無酸素で登るのか」と、ジョン・クラカワ(十一月号の本欄で紹介した「空へ」の著者)に批判されたが、当時彼は、次のように反論した。

「二十年の高峰登山経験から、私は高度順化したら、突然の酸素切れで高度順化を失う状態になるより、酸素なしのほうが、より安全に登山できるのだ」

あの悲劇の時、既に八〇〇〇メートル峰七座を登っていたブクレエ

フは、その後も休むことなく高峰への挑戦を続け、昨年春には、インドネシア隊の助っ人として、インドネシア隊員ともども四度目のエベレストに登頂。カトマンズで休養した後、すぐ二度目のロシアに向かった。

以下は、その時の話だ。

難波康子の遺体をシェルパの協力ですらしてもらったために、夫の難波賢一がエベレストのベースキャンプから一日下のゴラクシェップで待っていた時、登山家のカップルと出会った。それが、カトマンズから「戻ってきた」ブクレエフとリンダだった。

康子の夫と知ったブクレエフは、涙とともに、難波康子を救えなかった無念を語り、難波の遺体の周囲を石で囲い、二本のピッケルを立てて、せめてもの墓標としたことを打ち明けた。小さな石ころではない。八千メートルの高さで重い石を運んだのだ。

人間味も、プロとしての割り切りも持っていたのだろう。ブクレエフは、エベレストで起きたこと、ここの自分の行動について「The Climb」という本を、映画制作者のG・W・ドゥワルトに語る形で書き残した。ロシアの登山家の思いを、そこから読みとりたい。

『偈』のなかにみられる修行者への教えのうちで、登山に関連した言葉としてみられるのは第十三巻の「山水行」で、山は仏教修行の經典であるとしている。それに付随して、人間が悟りの世界に導かれる環境は第九巻に「溪声山色」の四文字に示される。「溪声」とは溪谷に響く清冽な水音で釈尊の声を表し、「山色」とはあらゆる形態、色彩を含む山の容姿に釈尊の姿が表れることをいう。その現実のすべてを受け入れて、悟りの世界に入れるのだとするのである。

石間氏が求めようとした藪山登山の神髄はここにあったのではあるまいか。孤独で草木の密生した藪山をかき分け、人の踏み跡もない急斜面をよじ登り、はるか谷底に溪流の響きを聞く。そこに東洋的な山へ向かう禅の思想を求める登山者の姿、石間氏の「溪声山色」の姿があったのではなからうかと思う。

天空の峰

中垣淑子

西シベリアに天空の峰という山がある。最高峰ヴェルフニイ・ズウブ(高い歯)は標高二一七八メートル、二番目に高いのはポリシヨイ

・ズウブ(大きな歯)二〇四五メートルである。高い山とはいえないが、この山群の名前に魅かれて行ってみた。

モスクワから飛行機でノヴォシビルスクに着くと、ガイドのゲンナジと妻のイーラが迎えてくれた。車で七時間かかってメジウドウレチェンスクのゲンナジの家に着く。長女のオーリヤ、次女のヴィエラ(十八歳)、それぞれのボーイフレンドのユーラとマキシム(十八歳)、友達のコーリヤ(十六歳)、アリオージャ(二十五歳)、それにヴィエラの愛犬デージー(四歳)が交代で山に入り、私のトレッキングを助けてくれることになった。

天空の峰の山域には半日ないし一日行程で山小屋がある。標高三六〇メートルのルウジユバ駅から奥の七八五メートルのタイジエ・スウ小屋までの間に四つの小屋がある。そのうちの一つは天空の小屋という。小屋は丸太造りでサウナもついている。利用するのはほとんど若者たちで、食料と寝具は持参。炊事とサウナの薪割りや掃除は自分たちでする。中には子供たちもいて「僕たち、働く少年団なんだ」といってサウナの水汲みや壁のペンキ塗りをしているのを見ると、何か道具がないと遊べないと思っている日本の子供たちに見

せてやりたいと思ってしまう。この山域には子供の家もあって、親のないう子供たち約三十人がいた。遊具はシーソーだけであとは大自然である。先生のアンナさんが家の中を見せてくださり、帰り際に記念にと数個の松ぼっくりをもらい、私を強く抱きしめた。

山小屋を結ぶ道は天山トウヒのような天を指すように細長く尖ったモミの林や、背よりも高いお花畑の中を通っている。最後のタイジエ・スウ小屋への道には高さが八〇センチくらいの巨大な蟻塚が七つもあった。蟻塚はモミの落ち葉を丹念に積み重ねて作られており、杖の先でつついたくらいでは崩れないほどしっかりしている。

山小屋を基地にしてテントを持って登る山には踏み跡がないので、お花畑を漕いで登る。登りながら大鹿の角を見ついたり、ゲンナジはアザミの根を掘ったり、獣の水飲み場に塩をまいたりしている。ワタスゲの咲く幕営地では、ゲンナジとコーリヤは池塘へ飛び込んでひと泳ぎ、アリオージャはヒマラヤユキノシタの枯れ葉、ナナカマド、岳樺、シベリア人参などを採ってきてお茶を作る。夕食を食べ始めると、シベリア名物の蚊にワツと取り巻かれる。顔を叩きながら食べる始末だ。小屋の

あるところには蚊は少なくて、一一五〇メートルくらいまで登ると、蚊の猛烈な襲撃を受けるのだった。

それでもアリオージャの作るハーブティーで内臓まできれいに洗われたような気持ちになる。獲物を狙って鉄砲を持ち歩いていたゲンナジはトレッキングも終り頃になって大鹿を仕留めた。その肉を私たちはたたくく食べ、残りは燻製のようにして持ち帰り、一部をお土産にもらった。

休日や雨による停滞日を含めて十九日間のトレッキング中、山小屋ではサウナに入り、毎日ハーブティーを飲み、大鹿の肉を食べたりしてシベリアの豊かな自然を満喫した。何よりも嬉しかったのはゲンナジを中心とした家族や友人たちの私に対する温かい心遣いだった。食料が乏しくなってもヴィエラは私にだけパンを一片多くついたり、トマトをつけてくれたりした。コーリヤもマキシムも私のペースに合わせて歩いてくれたし、渡渉の時は背負って渡してくれた。ユーラは車での送迎を引き受けてくれた。オーリヤは航空券を手してくれた。イーラとヴィエラは何時もおいしい食事を作ってくれた。

天空の峰にはヨーロッパやアメリカの人たちはかなりきているそうだが、日本人は私が最初だと聞いた。

各小屋にあつという間に情報が流れ、行き交う人たちが声をかけてくる。なぜ天空の峰という名前なのかいろんな人に尋ねたがわからなかった。

この山群とゲンナジ一家を紹介してくれたのはチョモランマ登頂者であり、昨年スキーで北極点に到達したアナトリー・モシュニコフである。



カット 小寺佳美

極私的登山観

杉江健介

最近の会報において登山観の変化を感じさせる二つの記事が興味をひいた。「公募登山と明日のヒマラヤ」と「死んで花実が咲くものか」である。一方にヒマラヤはじめ世界の高山岳での冒険的登山とトレッキング。一方に中高年以降に登山をはじめた人々の観光的登山と「百名山ブーム」。青少年時代に登山をはじめた人と、中高年以降のそれとは、個人の社会的背景の違いなどによりそのスタンスの差異は、全く噛み合わない登山観の根本的差異になる。

そこで私の場合、今から十七、八年前に大きな登山観の変化を意識した時期があったので、一個人的体験ながら書かせていただきたいと思う。

今夏、私は約四十年ぶりに穂高岳涸沢を訪れた。その間、大方の戦後派登山者が登山を行い難くなる三十代以降も山をやめることなく、日数回数とも少ないながらもずっと継続し、日々の山への想いも絶えることなく今に至っている。

しかし、山への考え方は途中、ヨーロッパアルプス・ドライチンネ登頂を境に大きく変わった。私の場合、高校山岳部、大学WV部、一般山岳会と、年齢に応じて好影響を受けながらもなぜか、時代のメジャーな山岳会傾向や、流行、マスコミによる先端的海外山岳思想にもある種、懐疑的だった。一部の山好きによくあるタイプといえるかもしれないが、型にはまるのが苦手だったこともあるし、表面的には時代の潮流をいつも意識しつつ、内面的には自分独自の価値にこだわっていた。

大島亮吉の世界に憧れ、心は高原と岩稜の間をさまざつたあぐく、ヨーロッパアルプス・ドロミテ山地に自分としての挑戦可能なパラダイスを見出した。二回のドロミテ山塊訪山により私なりの自己実現を得た後は、ヨーロッパアルプスとは対極的

な日本の藪山、岩山、宗教登山の山にひかれた。とくに西上州山地に数多く通ううち、高名なクライマーや有名登山家、また、独自の山の世界を持つ個性豊かな低山派など、多くの優れた知己を得た。見方によってはオタク的とも思われるこうした人々との交流によって、私は今までの山岳会主流的、ないしはマスコミ迎合的な登山界の在り方にも疑問を持つようになった。

アルビニズム、記録主義、登山形態の優劣など。何で皆がヒマラヤに憧れるのだらう。「高さ」という近代的価値基準の呪縛か？

そんな時、読んだ柏瀬祐之著「ヒト、山に登る」の衝撃は強烈だった。スリリングな話の展開と、今まで思ってもよらなかった人間心理の不思議そして、当時の世界的な科学万能主義から、ガイア思想、エコロジー、ニューサイエンス、東洋思想への回帰など。また大幅の価値観転換を迫られる世界的事件など、先端的な時代の思想の台頭には、まさに足元を崩される気がした。

それでも登山の世界はかなり保守的に感じられたが、ごく一部の若いクライマーたちには新しい考え方を持つ人々も現れているようである。それは、ストイックな「より高く、より困難へ」のアルビニズムから「ハ

イ」な気分を重視する快感主義（効率主義、享楽主義とは違う）とも思える登山観の変化。私は思う。多分、昔から登山者たちは知っていたのだ。役の行者から大島亮吉、アレスタ・クロリーからラインホルト・メスナー。

現在、多くの中高年大衆登山者は「健康」という最も普遍的な価値をもつ目的のもとに「百名山」詣でに忙しい。従来、登山の魅力には、一般的見地から何であのような苦勞をしてまで何もない頂上に登るのだらう、というある種、不可解なところがあった。それがここに来て「健康」と「百名山」というだれにも分かる命題を与えられた遊びになったのだ。それだけに表面的な遊びに終始するか、人間の生の根元をも垣間見ることのできる深い喜びを得るかは個人差が著しくなるだらう。故に百名山を達成したら「数量の登山」（遠心的）から解放され、内容の濃い「質の登山」（求心的）へと意識の覚醒に気づく人も増えてくると思う。

私は今夏、大キレットから北穂高頂上に登り着いた時、登山を始めて二度目の泣けるほどの大きな感動を得た。神秘体験？ 至高体験？ 単なる独り善がり？ ユング、マズロー、ニーチェ、バタイユなどの古今の学者の指摘にも共通の個人の内

面にはつきせぬ精神の不思議があるのを実感した。たかが北穂高で？ そうなのである。月面でそれを感じた宇宙からの帰還者たち。しかし、富士山の御来光に涙する人もいるのである。奇跡か？ 偶然か？ 従来こういった極私的体験を語るのには、客観性を重視する一般社会では忌避されてきたが、山という非日常の場を舞台として、登山観の変化著しい現代、登山者がこのような個人的内的体験を語っても、あえて許されるのではなからうか？ というより私は今、こうした極私的体験は超私的な普遍的体験となつて、多くの人の時代の意識に同調していると考える故に忌避やいかがわしさの壁を破つて語ることこそ責務である、といえるのではなからうかと思う。

ウエストン師の熊本での
クリスマス祭と幻灯講演

長田光義

ウォルター・ウエストン師が明治二十一年（一八八八）十月二十一日に、J・B・ブランドラム師（以下敬称を省略）に伴われて最初の任地である熊本県の百貫港に上陸したことは、川村宏氏他が編集された『山岳第八二年W・ウエストン年譜』

に詳しく述べられています。しかしその後明治二十二年五月七日にC M S大阪地方に転任を申請するまでの足取りに不明な点が多く指摘されています。

そのひとつは、ウェストンが『ブランドラムが英語を教えている学校で、その授業を分担した』とCMS本部へ報告しているその学校名は何かという点です。当時の熊本には明治二十年に開校した国立の第五高等学校（以下五中と記す）と明治二十一年に開校した私立熊本英学校があり、その他にも私立校が多数ありました。五中は明治二十七年に第五高等学校に校名変更し、昭和二十四年に現在の熊本大学に移行しましたが、五中の校舎は五高記念館となり、重要文化財として保存されています。この五高記念館の保存文献の中に、『ブランドラムが明治三十一年九月十六日から翌明治三十二年三月三十一日までの間英語嘱託講師として勤務したことが判明しました。また、他の文献によると夏目漱石の推薦によって嘱託講師となったことが述べられています。

熊本大学YMC A花陵会が発行した「五校・熊大キリスト者の青春―花陵会一〇〇年史―」によると、明治二十一年に五中の校舎が新築される時『ブランドラムが礎石にひざま

ずいて折った」ことが述べられており、当初から五中とブランドラムの深い関係が偲べれます。しかし、ウェストンが英語授業を分担した学校名については確証が得られていません。

次に、熊本県立図書館が所蔵する「熊本新聞」明治二十一年十二月二十五日付の掲載記事の中に、ウェストンがクリスマス祭と幻灯による講演を聖公会と英学舎の協力により行うことが述べられています。

熊本新聞

(明治二十一年十二月二十五日付) より

て観合三間なりと云ふ中めのお手帳にふを
○タヌトマス 今二十五日はタヌトマス
の當りなを以て本年七月より城内町町志
吾香會に於て當地の郡公會と英學會の人の發
起ふて幻燈會を催さるるに聞く處ふ據に該
幻燈は今度ケムストン氏の所持に來りて其
なる趣は呈す城下のよし因に記す當夜の幻燈
は同様に縁なれども人には一切観覽を許さざる等
に云ふ

○西園盛盛の出現 山形縣下田置玉田村は
不忘山麓にして居る處く興隆を業とする位

○クリストマス 今二十五日はクリストマスの当日なるを以て午后第七時半より区内新町忘吾会舎に於て当地の聖公会と英学舎の人々が發起にて幻燈会を催す由なるが聞く処に拠れば該幻燈は今度ウエストン氏が新に持ち来りし鮮明なる觀を呈するとのうよし因に記す

当夜の幻燈は同祭に縁故なき人は一切縦覽を許さざる筈なりと云

ふ

この記事中の英学舎が五中生徒を指すものか熊本英学校やその他を指すものかは現在のところ不明です。このクリスマス祭はウエストンの二十七歳の誕生日に行われ、熊本での幻灯による講演は翌明治二十二年六月八日に行われた立教大学での幻灯を用いた講演の先駆けとなるという点でも意義深いものがあります。

最後に、田畑真一氏の著書『W・ウエストンの信濃路探訪』に発表されたウエストンの「アルパインクラブ入会申込書」原文の登頂記録を見ると、白根山、富士山の後に九州での登山として、(阿蘇山、祖母山、桜島、高千穂峰、韓国岳)が記され浅間山、槍ヶ岳と続いています。この九州での登山では祖母山に明治二十三年十一月六日にブランドラムとともに外国人初登頂として登ったことが判明していますが、その他は年月日を特定する資料が未発見のようです。また、ウエストンの三冊目の著書である長岡祥三氏訳の『知られざる日本を旅して』の中には雲仙(温泉)岳、桜島の大噴火、人吉から八代までの球磨川下りや耶馬溪の記述などもあり、これらの年月の特定が望まれています。できますればこれらの情報や資料をお持ちの先輩諸兄のご教示をお願いいたします。

図書紹介



イラスト 野田四郎

大森薫雄・著

「ひざの痛みを治す」

加齢と積年の酷使によって膝の痛みを感じている方は、本会会員の中にも多数いらっしゃるのではないだろうか。さらにお医者さんに診てもらえば言下に「山はやめ」といわれるだろうと診断を受けるのをためらっている方も、これまた多いのではなかろうか。そうした方々、さらには近々膝が破綻をきたすであろうと内心戦戦恐恐の方にもお勧めしたいのがこの本である。なぜなら、かなりの変形性膝関節症であろうとも「山登りをやめる必要はありませんよ」と太鼓判を押し、諄々とその対処の仕方を教えてくれるからである。私事で恐縮だが、私もこの本を読んだと安心して一人である。

ただし変形性膝関節症の克服には王道なし。的確な診断を受け、お医

者さんにいわれたことをしっかりと守り、四頭筋を鍛えるなどの運動を根気よく続けていかななくてはならないことも懇切に説いている。

また、変形性膝関節症を主とする膝の故障対策ばかりではなく、中高年者の山登りに関する一般的な健康上の注意も述べられていて、本会会員の座右の一冊。 (横山厚夫)

一九九七年九月 東京書籍発行
一九八ページ 千三百円(税別)

三枝礼子・編著

「ネパール語辞典」

デーヴァナーガリー文字の配列順で、見出し語二万六千五百語。発音記号に代えてローマ字転写。その訳語は的確で、読み物としても興味深い。付表として動詞の活用、主な親族の名称などがある。見返しの「ネパール行政区分」と「ネパールの主要河川と山」の二葉もありがたい。

一九六九、七〇年秋の、大阪大学P29登山隊員だった編著者が、ネパール語に親しんでから二十五年。その後半八年間に紡ぎ出されたこの辞典は、ずっしりと重い。もう一つのP29にかけた三枝さんの、ゆるゆるとした息の長い歩みに、ただただ五体投地である。

(石坂昭二郎)
一九九七年十月 大学書林発行

一〇一七ページ 三万六千円
(税別)

稲本 正・著

「木の聲」

自然保護や環境問題に悲観論を述べることなく、常に前向きに取り組むことで、一步一步前進させたいと著者は力説する。飛騨高山近くの山林に住み、オーク・ヴィレッジを創設、「ドングリの会」の主宰など、実践を通して読者に語りかける。

木を植えた人々にはじまり、木と語る人々、木と暮らす人々、木を守る人々、木を組む人々の五章に分かれ、木と人間との伝統的なかわりあいを通じて自然の大切さを訴える。東京大学教授でありながら教壇に立つことなく、北海道・富良野の演習林に学生がくれば森という最良の教授に出会えると説く通称ドロ亀さんの話、ダム工事で湖底に沈む桜の大木を移植し、沈んだ村にかつて住んでいた人々の再会の場所となる話など、感動的な話題が多い。

山がより自然であるためには、広葉樹の植林が大切であり、自ら荒れ地にナラやカエデ、トチノキなどの木を植え、森の温もり、自然への回帰を問う。

(林 栄二)
一九九七年七月 小学館発行
二五〇ページ 千七百円

横山厚夫・著

「山の森へ」

本書は、山の本の紹介というより山の本の楽しさを紹介した本であり、その楽しみ方まで教えてくれる。

和洋の古典といわれる本から山岳冒険小説まで、さらには登山にまつわる映画まで「ヨコヤマワールド」は広がる。図書館や古書店での本の探し方に触れてあるかと思えば、青と赤のメガネでのぞく、なつかしい「立体地図集」などの話が出てくる。かと思えば、登山に関わる一族四代の大河小説「果てしなき山脈」の構想が登場する。

著者の絶妙な語り口のせいもあるう。読者は知らず知らずヨコヤマワールドに迷い込んだアリスの気分、もちろん案内してくれるウサギは著者(失礼)。そして気がつく。山の本の楽しみ方は限りなくあるのだとそれにしても「ほれ、そこでガイドブック『東京都の山』の雲取山のページをばたばたコピーしているおばさん、こちらの本も読んだほうがいいと思うんだけどなあ」のくだりではニヤッとさせられる。山書(山椒)は小粒でもピリッと辛いのである。

(三好まき子)
一九九七年三月 山と溪谷社発行
二四三ページ 千五百円

図書受入報告 (1997年11月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
日本山岳会東海支部 (編)	ウルタルII峰：さくっと登ってきます	211pp/21cm	ウルタルII峰編集事務局	1997	発行者寄贈
桑原武夫	登山の文化史 (平凡社ライブラリー No.222)	221pp/16cm	平凡社	1997	出版社寄贈
串田孫一 他 (共編)	甲斐駒ヶ岳 (日本の名山 第16巻)	251pp/20cm	博品社	1997	出版社寄贈
山と地図のフォーラム (編著)	パソコンで楽しむ山と地図：マルチメディアの山旅	237pp/21cm	実業之日本社	1997	出版社寄贈
明治大学ワンゲル部 (編)	明治大学ワンダーフォーゲル部・六十年のあゆみ	448pp/27cm	明治大学ワンゲル部	1997	発行者寄贈
石井鴻 (編)	ネパール (暮らしがわかるアジア読本シリーズ)	334pp/20cm	河出書房新社	1997	出版社寄贈
工藤隆雄	続・富士を見る山歩き:ShotorTravel	159pp/22cm	小学館	1997	出版社寄贈
静岡新聞社出版局 (編)	静岡県とその周辺の日帰り滝めぐり	160pp/19cm	静岡新聞社	1997	出版社寄贈
高橋清輝	女子高生・汗と涙の初登頂 ：立川女子高校山岳部・未踏峰コンゲール4峰への挑戦	214pp/20cm	大日本図書	1997	著者寄贈
本の出版社 (編)	登山・ハイキング・バス時刻表：関東版 98冬春号	511pp/18cm	書苑新社	1997	出版社寄贈
本の出版社 (編)	登山・ハイキング・バス時刻表：近畿版 98冬春号	495pp/18cm	書苑新社	1997	出版社寄贈

会務報告

【十一月理事会】

日時 十一月十二日

場所 日本山岳会会議室

「出席者」 斎藤会長、小倉、大森、竹内各副会長、吉永、田邊、伊丹、熊崎、絹川、勝山、村井、飯田、鯉坂、増山、森、大蔵、宇田川、宮崎、坂本各理事、石橋、神崎各監事、穴田、中川、中村各常任評議員

「委任」 大屋理事、平山、長尾、平野各常任評議員

◎議事に先立ち、日本山岳会ダウラギリI峰登山隊一九九七・松原隊長より、まれにみる豪雪と雪崩の多発により期日いっぱい粘ったが、七五〇メートル最高到達点で断念。十一月九日全員無事帰国の経過報告と支援に対するお礼の挨拶があった。

【審議事項】(司会進行 吉永理事)

(一) 名誉会員の件

十月十五日開催の評議員会議で五名が推薦された。承認

E・ヒラリー(七八) N Z

船越好文(七六) 会員番号一九四六

近藤 等(七六) " 二二三三七

村木潤次郎(七三) " 三四七二

山本朋三郎(七七) " 三七二三

(二) 永年会員の件 吉永

四七年度入会会員十七名(一九四七年一月入会の小滝清次郎 福島支部から四八年三月入会の大賀寿二 関西支部まで)に対し、晩餐会席上で永年会員章の授章を行う。承認

(三) 秩父宮家ご遺贈金の件 吉永

ご趣旨に対する顕彰として記念賞創設の発案があり、竹内副会長に委員長を委嘱、検討委員会を組織して内容の検討に当たる。承認

(四) 支部長会議・晩餐会(十二月六日、於新高輪ホテル)の件 吉永

支部長会議 十二月十二時「紅玉の間」

年次晩餐会 十六時・受付 十八時

・開宴「北辰」

招待者 国内、国外(カナダ、ネパール)より八名の予定。

展示 「支部とっておきの山」二十

四支部出展「慶雲の間」

予算 出席者は七百七十五名と見込み、千百万円とする。承認

(五) 写真掲載、貸し出し許可願の件 吉永

(株)講談社より週刊「日録二十世紀」一九四〇年号に、ウエストンの写真掲載、並びに写真の貸し出し許可願が出された。承認

(六) 中高年登山者対策の件 吉永

十一月二日荒島岳で同好会山行における事故を契機として議論が必要である。大森副会長

①懇親の飲食は節度を保ち、翌日の登山に備えるのは常識。

②中高年意識の欠如。

③登山に対する意識の向上とメディアカルチェック、技術トレーニングを。

④中高年でも技術を学ぶ人はいる。

指導委員会などが定期的に継続してJACの事業として取り組むべきではないか。

⑤その他、入会制度、保険の義務付け、旅行業者のツアー登山、マイペイスでの個人山行、「指導員制度(文部省)に対する視点などが議論となる。

継続審議

【報告事項】

(一) 平成九年度上半期決算 吉永

内容は別紙資料の通り。広島支部発足に伴い相当数の入会希望者があるので、収入については一〇〇パーセント達成の見込み。支出率は昨年度並だが、九〇パーセントくらいに抑え、財務として余裕をもちたい。

監事より指摘の件はすでに検討中。

(二) ネパール国際山岳博物館「募金」委員会 伊丹

十一月十日募金委員会を開催。推進者のネパール山岳協会会長ダワ・ノルプ氏が急逝されたが、引き続き計画の支援を継続し、募金目標二十万に。会全体で対応するためにも委員長・斎藤会長、実行委員長・大森副会長に委嘱、年次晩餐会で趣意

書を配布し会員にお願いしたい。

(三) 「山岳」会員名簿 田邊・坂本

「山岳」は年次晩餐会で発刊。「会員名簿」は郵便番号七桁に対応するため準備中。晩餐会参加者以外の会員には送料節約のため宅配便を検討。

「名簿」の広告収入は百八十万円。

(四) 尾瀬賞 森

第一回尾瀬賞の案内があったが、対象要項は「五十歳未満、湿原に関する学術的及び湿原保全に優れた業績と、自薦」の条件であり、科学委員会では見送りとする。

(五) 全国支部懇談会 吉永

第十五回全国支部懇談会は一九九八年九月十九、二十日、秋田支部主管で開催決定。会場は男鹿半島、奇習「なまはげ」の里、真山(本山)のおやまげ(縦走)を予定。

一九九九年 岐阜支部、二〇〇〇年 東九州支部の主管と決定した。

(六) 山陰支部晩餐会出席依頼 吉永

十二月十三日、米子市で開催の支部晩餐会に本部よりゲスト一名招待の依頼があり斎藤会長が出席。了承

(七) 富山支部創立五十周年記念式典出席依頼 吉永

九八年三月二十二日、富山市で開催。本部より斎藤会長、小倉副会長、勝山理事が出席する。了承

【委員会報告】

●指導委員会・熊崎

ネパール国際山岳博物館募金のお願い

会員の皆様へ

年次晩餐会の会長挨拶でも触れておりましたように、ネパール山岳協会がポカラに国際山岳博物館の建設を計画中です。

1956年のマナスル初登頂以来ネパールヒマラヤにおいて、本会をはじめ数多くの日本の登山隊が活躍し、また近年の多様なヒマラヤ・トレッキングにより、ネパール王国とネパールの人々には一方ならぬお世話になってきました。そこで、感謝の心を伝え、何らかのお返しをしたいということで、日本山岳協会、日本ヒマラヤ協会、日本勤労者山岳連盟、HAT-J、日本ネパール協会などのご協力を得ながら、国際山岳博物館建設に大きな支援の輪を広げたいと考えております。

本会が中心になって強力に募金活動を推進していくことが必要であろうと思い、会員の皆様に暖かいご協力をお願いする次第です。

(社)日本山岳会

ネパール国際山岳博物館募金委員会

委員長 斎藤惇生
実行委員長 大森薫雄

募金目標 2,000万円

募金方法 1口5,000円

(できるだけ2口以上お願いします)

募金期間 平成9年12月1日～
平成10年12月31日

振込口座

郵便局

(振替用紙をご利用ください)

00150-6-416769

「ネパール山岳博物館建設募金委員会」

銀行

東京三菱銀行市ヶ谷支店 (014)

普通預金 0908314

「ネパール山岳博物館」

第一勧業銀行市ヶ谷支店 (014)

普通預金 1638971

「ネパール山岳博物館」

あさひ銀行市ヶ谷支店 (270)

普通預金 1166954

「ネパール山岳博物館」

*ネパール国際山岳博物館建設募金に関するお問合せは、日本山岳会の募金事務局までお願いします。

募金事務局長 伊丹紹泰

TEL 事務局 絹川祥夫

FAX・03-3261-4433

・03-3261-4441

十月二十四・二十六日、文登研において学生部・青年部及び指導委員会、遭難対策委員会合同で岩登り研修会を開催。中身の濃い研修を行った。参加は二十八名(うち学生十九名)、講師は柳沢文登研所長他六名。

●学生部指導委員会・宮崎

十一月十五日、法政大学において全国大学山岳部監督会議を開催、韓国より六名の参加、八十・九十名の参加見込み。

十一月十六日学生マラソン大会を皇居周辺で開催、参加(団体、個人)二十校の予定。

●資料委員会・鎌坂

第一回全国山岳博物館等連絡会議を十月二十四・二十五日、山岳に係る博物館、美術館との交流を目的とした会議を山研で開催。各地より八館参加。資料収集、保管管理、寄託・展示方法、情報交換、およびネットワーク作りなど、熱心に討議された。将来の活動の示唆が得られたので、資料委員会が事務局を務め、継続発展させたい。

●山研運営委員会・坂本

十月二十六日をもって本年の業務を終了。水源から山研受水槽までの採水ホースの水抜きは山研委員会が行い、受水槽から建物内部は松本土建が保守契約に基づき二十七日に実施。管理人・内田二葉さんは退職、

ルーム日誌

九八年四月からは木村太郎・弥生夫妻を新任管理人として迎える予定。

11月	アルパインスキークラブ ア
4日	ルパインスケッチクラブ
5日	フィルムビデオ委員会
6日	常務理事会 学生部 山学研
7日	総務委員会 フォトビデオクラブ
10日	図書委員会 アルパインスキークラブ
11日	自然保護委員会 二火会 ア
12日	ルパインスケッチクラブ 95
13日	同期会
17日	理事会 山岳編集委員会 学
18日	生部 93同期会
19日	集委員会 青年部 学生部
20日	総務委員会 山岳編集委員会
21日	山げらの会
25日	資料委員会 百年史委員会
27日	三水会 山研委員会
28日	科学委員会 学生部
29日	高所登山委員会
29日	自然保護委員会
29日	総務委員会 集委員会 学
29日	生部
29日	総務委員会
29日	青年部

11月来室者97名

INFORMATION



◆第二十九回山岳圖書を語る夕べ

図書委員会

日本の山登りに関して写真がどのように扱われ、本や雑誌の口絵とどのようにからんできたのか、を山岳写真研究で知られる杉本誠会員(元『岳人』編集長)に話していただきます。とくに写真に興味のある方の参集をお待ちしております。

日時 二月十七日(火) 十八時三十分
場所 日本山岳会集會室
演題 「山の写真の謎解き」
講師 杉本 誠会員

◆富山支部創立五十周年記念式典

富山支部

昭和二十三年、終戦後の山岳会活動の復活や各大学山岳部が本格的活動を開始し、積雪期のバリエーションルートの登攀に成功するなど、山岳界は活況を呈してきました。富山でも日本山岳会会員の沼倉寛二郎、松村高二人の転勤により支部発足の機運が高まり、若林啓之助、遠藤忠

義の四人が発起人となって三月二十三日、電気ビルで設立総会と発会式をあげました。それから満五十年の節目を迎えました。これを記念し、式典・祝賀会を開催します。

日時 三月二十二日(日) 十四時
場所 富山電気ビル(富山市桜橋通り三番一号)TEL・〇七六四一三二一四二一

内容 ①記念式典 十四時

②講演「日本の南極観測」

講師・第三十七回南極観測越冬隊副隊長 川田邦夫(富山大学助教授)

③祝賀会 十六時〜十八時

会費 一万円

◆96同期会第一回講演会

96同期会

昨年発足した96同期会の第一回の講演会です。本来なら温帯から極地まで六〇〇〇キロも移動しないと見ることのできない植生が、二〇〇〇メートル登るだけで出会える日本アルプスの樹木分布とその素顔を紹介。96同期会以外の方も大歓迎です。

日時 二月十四日十五時〜十七時

場所 日本山岳会集會室

演題 「樹木の世界」

講師 石井誠治会員(樹木医・森林インストラクター)

問合せ 飯田邦幸 TEL・〇三三三三六八一九六五四

◆97前期同期会親睦ハイキング

97同期会

日時 二月二十八日(土) 雨天決行
集合 小田急線「伊勢原駅」改札口九時

行程 丹沢阿夫利神社・関東ふれあいの道・七沢温泉(入浴、夕食懇親会―費用別途) 希望者には宿泊予約します

申込 通信費として千円を添えて「日本山岳会97同期会メールボックス」宛、一月末日までにご連絡ください。

問合せ 池谷健 TEL・〇四二二一六六二二四八五

◆インターネット・ホームページ

データバンク研究会

昨年十二月の年次晩餐会を契機に「ホームページ」がスタートしました。海外向けの英語版と国内向けの二本立て構成されております。スタート以来見てくださった方は大変多く、これからの編集に力が入ります。引き続き内容の充実に全力投入いたしますので、皆様の応援をお願いいたします。

「URL」と「E-MAIL」のアドレスをお知らせいたしますので、どうぞアクセスしてみてください。

「URL」

http://www.jac.or.jp/

「E-MAIL」アドレス

jac.info@mx5.nisq.net (山口俊輔)

◆日本山岳会団体傷害保険のご案内

総務委員会

山を楽しむためには、山行中の事故に対する安全対策は日ごろより必要です。現在まだ、山岳事故に対応できる保険に加入されていない会員には、日本山岳会の団体傷害保険をおすすめします。資料はハガキで総務委員会宛ご請求ください。

■訂正 六三二号(十二月号)二三ページに印刷ミスがありました。新入会員紹介の二十三人目は詹建勳さん(会員番号二二六三二)です。お詫びして訂正します。

◆編集後記

新年おめでとうございます。本年も読みやすい会報の発行を目指します。会員の皆様、よろしく願い申し上げます。「会報編集委員会一同」

日本山岳会会報 山 632号

1998年(平成10年)1月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤淳生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社